「御霊に満たされ、妻を愛し、夫に従う」

エペソ人への手紙５：２１－３３

May.25.2025

エペソ人への手紙５：２１－３３（パワポ）

Preface

なんと美しい御言葉でしょうか。

そして、なんと全ての問題の本質を突いた御言葉だろうかと思います。

思えば、私自身子としてこの世に生を受け、幼い頃からずっと望んできたのは、生まれて来たと同時に目の当たりにする一番近くの人間関係、両親という夫婦が仲睦まじく過ごしていること、そして自分もいつの日か、やがて出会う素敵な女性と、仲睦まじい夫婦となって生きたいということでした。

記憶を辿って行って思い出せる範囲で言いますと、小学校１年生ぐらいの時からなぜだかずっと、素敵な女性に出会って、素晴らしい結婚生活を送りたいという願望を持っていって、よく妄想にふけっていたように思います。

私が育った家庭は、父が思春期真っ只中の荒れていた４人の子連れの再婚、母は初婚で、しかも韓国から、在日朝鮮人の父に嫁ぐというほぼ国際結婚のような結婚で、まあ言葉にしただけでも、その状況と言ったら色んな意味で普通ではないと言っていいのでしょうか、大変だっただろうなあと容易に想像がつく波乱含みの夫婦、家庭生活が始まったんだと思います。

そんな父と母にも、当然のように、大概の夫婦に訪れる大きな離婚の危機が訪れたこともありましたし、母が父ゆえに泣いている場面、父が母を泣かせている場面、母が父のことを私たち子どもの前で非難している姿も見てきましたが、それでもまあ両親は、仲のいい仲睦まじい夫婦だったんじゃないかなあと思っています。

嵐のような夫婦関係の両親を見た時には、「こんな夫婦じゃない、将来、まだ誰か分からないけれども素敵な女性と出会って夫婦になりたい」と思っていたと思いますし、それでも何だかんだ父と母が互いに慕い合って、奥深いところでは信頼し合って、冗談を言い合っている姿を無意識の内に見てきたことは、私の中の深層心理となって、「ああいう信頼し合える夫婦でありたい、夫婦として将来生きたい」と、小さい頃から本能的に思って来たように思います。

そしてやがて、イエス様を信じ、クリスチャンとなって聖書の御言葉を見てみますと、「素敵な人と出会って、素敵な夫婦になりたい。素敵な家庭を築きたい」と思うのは、何がどうあれ、過去にどんな経験、どんな前提があったとしても、どんな人のうちにも神様が植え付けて下さった本能的な思いであるということ。

しかも、神様が定めて下さった祝福の現場、祝福の営み、社会性を持つ人間

が生きていく上で最も重要で大事な共同体としての最小単位であるということを知りました。
　つまり、夫婦とは、私たち人間の思いや、偶発的に生じたと考えられている天然世界の営みや流れの中でただ何となく発生したようなものではなく、明確な意志があった。
　神というお方の明確なご意志の下、神から発し、神が定めた重要な人間の有り様だということです。
　だからこそ、先週まで見てきました、「聖霊に満たされ、キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」という御言葉、私たちに対する神の期待、神のご命令の実践現場として先ず最初に言及されるのが、夫婦なんだと思います。
　夫婦こそ神のご介入が無ければならない、聖霊の満たしが現れ、表し、必要不可欠な、霊的祝福の最も基本的な実践現場だということでしょう。

　また、今日のこの聖書箇所の御言葉が面白い興味深いのは、生涯独身であった使徒パウロ先生が語っているという点だと思います。
　イエス様の十二弟子のリーダーであった使徒ペテロには家庭がありました。
　同居していたと思われるペテロ先生の姑が、イエス様に熱病を癒やされたという場面が福音書の中に出てきますが、そんな使徒ペテロ先生が、夫婦について語るならば、まあ分からなくもないと思うのですが、一度も結婚したことのない生涯独身であった使徒パウロが、夫婦の有り様について語っているのが興味深いですし、逆に、誰かと夫婦を経験したことのない使徒パウロ先生だからこそ語れる、そんな使徒パウロだからこそ、ただ聖書の神の言葉に立脚した夫婦について語ることが出来たんだと思います。

　私が大学生の頃ある友人が、「いや、パウロが本当に独身だったらこんなことは言えないよ。僕は、パウロが既婚者だったと思ってるんだよね」と言っていたことがあるのですが、私は、その言葉に同意出来ませんでした。
　「逆に独身だったからこそ、出来た出来ないに関わらず、自らの経験や先入観に捉われずに、ビシッと神の言葉を神の言葉として、本来あるべき神が望んでおられる夫婦の姿を語ることが出来たんだ」と思いますし、また「神様の人の用い方は、いつも私たち人間の想像を超えるものなんだなあ」と思わされるばかりです。
　さらには、第一コリント７章では、パウロ先生ご自身がそうであったように、人には、「独身」という賜物が与えられている人がいるということも指摘されながら、その上で、聖霊の満たしの最も端的身近で重要な実践現場として、夫婦関係を御霊に導かれながら書き上げて下さったんだと思います。

Part One

　そんな使徒パウロが夫婦について教えて下さる中で、神の視点、神がお造りになった世界という観点からこの世界を見た時、決して外すことの出来ない、この世界を形づくっている土台となるような創世記の御言葉を取り上げて下さ

っています。

エペソ人への手紙５：３１－３２ａ（パワポ）

聖書の最初の書物創世記には、主なる神様が、６日間力を尽くして、万軍の主の熱心をもって天地万物をお造りになられた事実が記録されています。
そして、その御業の最後に、最初の人アダムを創造されました。

そんな神の御業を黙想しながら、「神様の創造の目的はどこにあったのだろうか？」と考えます。
「神様は、神ご自身のために天地を創造されたのだろうか？　それとも、ご自身の子として最後に創造されたアダムのために世界を創造されたのだろうか？」と考えた時、私は、後者だと思います。

最後にアダムをお造りになってから神様は、アダムにこのように語り掛けたのではないだろうかと想像します。
「アダムよ、これすべて、あなたのために、あなたにあげるために造ったんだよ。」
だからこそ、神様は、熱心をもって力を尽くされながら天地万物を創造された。
６日間かけて、神の熱心の全てをかけて、美しいエデンの園、楽園、神の国を創造して下さいましたが、当のアダムを見てみますと、創世記２章に、何か物足りない、あまり幸せそうに見えないアダムの姿が描かれています。

そんなアダムの心を察した神様はすぐに、アダムを深い眠りに就かせなさいます。
この、アダムを深い眠りにお就かせになった神様の姿に、大事な子どもを懐に抱いて、安心してぐっすり眠れるように何物からも守っている母親の姿が重なると同時に、その温かい懐に抱かれて、平穏な表情を浮かべながらぐっすり寝ている子の姿が思い浮かびます。
そうして眠っているアダムのあばら骨の一つを取って、アダムにとって二つとない大事な存在として、エバを創造して下さいました。

そんなエバをアダムが初めて目にした時発した言葉は、人類が誕生して以来、此の方、最も美しい言葉であり、私たち人にとって、この世界にとって、最も必要な言葉だと思います。
「これこそ、この人こそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。」

マルティン・ブーバーという方が書いた「我と汝」という本があるのですが、その中で、人間関係において私たちが大切にすべき最も基本的な関係は、「我と汝」、「私とあなた」という二人称の関係のはずなのに、大部分の人間関係を、

三人称の関係で生きてしまっているのではないかと言うんです。
「私とその人」でもなく、「私とそれ」という関係。
距離が生じ、人を温もりある存在としてではなく、物扱いしてしまうような三人称の関係です。

ところが、アダムとエバは、当然三人称の関係ではなく、「我と汝」・「私とあなた」という二人称の関係でもなく、一人称の関係です。
「私の骨からの骨、私の肉からの肉」、即ち、「あなたは私」という一人称の関係です。
「あなたは私自身であり、あなたは、私という人の最も大切な私です」という関係です。

皆さん、他の誰かを見て「私だ」と認識し、その人のことを、私という存在の中でも最も大切な私として認識出来ること以上の、人間が抱えている全ての問題の根本的答えは無いと思いますし、この罪な世界にあっては、驚くべき、不可能とも言えなくもない、物凄いことだと思いませんか？
でも、人は本来、神からそのように造られたということを聖書は真っすぐに語りながら、そして、その驚くべき、不可能とも言えなくもない、閉じられていたような物凄いことの道が再び開かれ、回復していると、今日のエペソ書の箇所を通して使徒パウロ先生が教えて下さっています。

エペソ人への手紙５：２８－３３（パワポ）
エペソ人への手紙５：２１－２５（パワポ）

何度も、「キリスト」が出てきます。
「キリストを恐れて」、「キリストに従うように」、「キリストが愛したように」、「私たちはキリストのからだの部分だからです」。
「キリストが私たち一人一人のことを、ご自身の体、ご自身だと認識して下さったように、あなたもその人を、妻は夫を、夫は妻を」という道が回復し、再度開かれたことを教えて下さっています。
一度失ってしまった、二人なのに一人という一人称の関係を、人間関係の最も基本であり、土台であり、根幹である男と女の関係、夫と妻の関係に表すよう、聖霊によって現れ、聖霊の神さまによってのみ現れるのが、夫と妻の一人称の関係だと教えて下さいます。
人間が作った「高尚だ」と宣う教育制度において語られることもなく、語ることもなく、教えられた教えることもなかった奥義を、事実を、今、生涯独身だった使徒パウロ先生が、神の霊に導かれて、ただ聖書の神の言葉に従って教えて下さっています。

Part Two

今、エペソ書で語っている聖霊のご介入あっての夫婦関係、キリストにあっ

て今一度その本来の姿を回復させて頂いた、閉ざされていた道が開かれたような夫婦関係とは、ある日突然、キリスト教という宗教がこの世に誕生し、その宗教を広めるために人が考え編み出したポット出の宗教用語ではなく、創世記、つまり、人が最初に神によって造られた時のオリジナルの姿・原形だということですね。

創世記１章に、神様が人をお造りになられた時、「人をわれわれのかたちに、われわれの似姿に造ろう」と仰せになられたことが記録されていますが、神ご自身が、ご自身のことを、「われわれ」という一人称をお用いになりながら、人をお造りになりました。
父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神様が、ご自身のことを「われわれ」と、三人称でもなく、二人称でもなく、一人称を、一人称の複数形をお用いになりながら、その一人称である神のかたちに人をお造りになりました。
つまり、人という存在は、他者との関係の中において、三人称の関係でもなく、二人称の関係でもなく、本来一人称の関係を持つように造られたということです。

この世界になぜ争いがあるのか、なぜ私たちは争うのか、なぜ嫉妬し、なぜ傷つけ、なぜ自分の正しさを主張し、なぜ人の間違いばかりを指摘しようとするのか、「神のかたちである一人称を、人は失ってしまったからだ」と聖書は教えてくれます。
最初の男、最初の女、最初の夫と最初の妻であるアダムとエバの中に、この一人称の関係を作って下さった、二人なのに一人であるという関係。
しかも、「人をわれわれのかたち、われわれの似姿に造ろう」と仰せになりながら、アダムとエバのそれぞれのうちに神の霊、神のいのちの息を吹き込んで下さり、神あっての祝福の一人称の関係を構築して下さったということです。
即ち、アダムとエバと神という、ここにも三位一体の唯一まことの神の似姿、神のかたちが見られるということでもあり、人は、神の存在をその内に、その間に見出すことによってのみ、初めて人本来の姿を取り戻すということになるんだと思います。

では、私たちの人間関係の中に、この神のかたちが見られるでしょうか？
私たちのこの世界に、この神のかたちがあるでしょうか？
私たちの日々の暮らしの中に、神の似姿があるでしょうか？
私たちの他者との関係の中に、この神の似姿があるでしょうか？
夫と妻との関係の中に、この神のかたち・似姿がありますか？
一度無くなってしまったけれども、また、あるようにされたのが、イエス・キリストの十字架の救いによる私たち人間関係における神のかたちであり、男と女、夫と妻という社会を営む上で最も小さいけれども、最も大切な、最も重要な、キリストゆえの、キリストにある一人称の共同体です。

Part Three

夫と妻、男と女という性は、神がお造りになられました。

神は、人をお造りになられた時、男と女という性をお造りになられ、その二つの性が一体であるというところに、神の霊も一つとなって共にいて下さるようになりました。

少なくとも聖書は、(聖書に少なくともという言葉を使うのは失礼なことかもしれませんが)、聖書は、男と女以外の性についての言及はしませんし、その存在を肯定している聖書箇所も無いように思います。

そしてもし、男と女が一体となるという関係以外の性があるとすれば、それは、人が神に背くという罪を犯した結果、神がアダムとエバにすべてお与えになった神の国、楽園、エデンの園を追放された後に出て来た、人が正に、神の御前に罪人となった証拠として、罪人ゆえの霊的症状として聖書の中に登場して来るだけのように思います。

誤解しないで頂けますと幸いです。

私は今、この講壇から、この社会の誰かを差別しようと話しているのではなく、使徒パウロがローマ書で仰っているように、神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られたものを拝み、それに仕えながら、そのことを知識だとか、知性だとか、時代だとか、自由だとか、楽しみだとかと主張しながら、この世界を回している私たち人間の愚かさ、鈍さ、空しさを先ず正直に、真っすぐに、誠実に見つめる必要があることを分かち合いたいのです。

神を忘れた人間が、人間の思いや考えや感情や情欲に従って、神の造った秩序をねじ曲げた世界を作り、その世界の調子に合わせ、その世界に染まることを理性的だとか、自由だとか、権利だとかという気高い言葉の羅列とともに人を神から遠ざけ、さらに離そうと熱心に働いているサタンの存在を認識しながら、神の赦しとあわれみと愛をもって互いに受け止め従い合いながら、私たちは生きなければならないということを知る必要が、今この世界、人が王として君臨している私たち人類は知る必要があるように思うのです。

そういう意味で教会は、神様がこの地にお立て下さった罪人専用病院なんだと思います。

イエス様は、正しい人・義人を召し出すためにこの地に来たのではなく、罪人を召し出すために、愛するために、受け止めるために、赦して、癒して、回復させるためにこの地に来られました。

そして教会は、そんな人々がともに安心して養生出来る神が打ち立てた病院であり、皆に必要な病院であり、互いの痛みを分かち合い、互いの痛みの癒しを願い、互いの痛みを一緒に神の前に差し出す湯治場、みんな痛みや傷を持っている人同士の恵みの場、ここに神の病院があることを知って頂く必要があるんだと思います。

そうして、神の恵みにあるすべての人間関係における基礎が、「キリストにあって」、「キリストに従うように」、「キリストが愛したように」、「キリストのからだの部分として」の男と女、夫と妻それぞれが、それぞれに自分の妻を自分と同じように愛し、自分の夫を敬い、従うことなんだと思います。
このことについては、来週、もう少し探っていきたいと思っております。

Conclusion

最後に一つの事件を紹介して終わりたいと思います。

先週、新聞で、たぶん私が今まで見てきた中で、一番ショッキングだったと思う記事を読みました。
あるお宅で、男と女の体それぞれに、刃物による刺し傷、切り傷が数箇所見られ、血まみれで二人一緒に死んでいる遺体が見つかりました。
そして、その事件を目の当たりにしたその家に住む５歳の幼子の証言によりますと、「お父さんとお母さんが、手に刃物をもって喧嘩していた」ということです。

「その子どもは、これからの人生どうなってしまうのだろか、どう生きていくのだろうか」と、主の助けと御守りを祈らずにはいられませんでした。
そして、ともすると、愛する、愛していたはずの妻や夫に対して、一人称の関係や思いを抱けずに、二人称どころか、三人称の「私とそれ」という感情に支配されてしまう、自らその支配に明け渡してしまう私自身の姿、私たち人間の、神を忘れた無慈悲な姿を省みるような思いがしました。

最後にエペソ書５：３３の御言葉を読んで、この御言葉の祝福が、私たちに、皆さんにあることを願いながら終えたいと思います。

エペソ人への手紙５：３３（パワポ）

お祈りいたします。
祝祷：エペソ５：３３